

## 新作玩具体験会―前編―サンプル

とあるオフィスビルの三階。ここでは不定期で系列会社の作るアダルトグッズの体験会が開かれている。

「やあ、慶人くん」

一体どうやって客を招待しているのかは分からないが、なぜかいつも同じ男性客が慶人の担当となっていた。

ピシリとしたオールバックに整った眉。えんじ色のネクタイが似合う濃紺のスリーピース。絶対どこかの重役だろうと思うけれど、昼間からこんなところに来ていいのだろうか――当然相手のプライバシーに関することを訊くことはできないけれど。ただ唯一、男は苗字だけは教えてくれていた。本当は嘘の名前かもしれない。でも「内緒だよ」と言っただけでそり教えてくれたことが嬉しかったので、正直嘘でもいいや、と思っている。

「こんにちは、宗形さん」

「今日もよろしく」

「宜しくお願いします」

微笑む度に見える目尻の皺。ここで会うだけなので声を出して笑うようなところは見たことがないけれど、きつと普段から穏やかに笑うのだろうな、と想像している。

このバイトを始めて三か月。どれほど開催されているのかは分からないけれど、慶人の参加は今日で六回目。二回目で偶然宗形に当たり、それからはずっと宗形にしか接客していない。でも一緒に働く人に訊いてみるとどうやら担当制ではないようなので、不思議で仕方なかった。嬉しいけれど。

「さあ、行こうか」

ここでの仕事は単純だ。開発された新作アダルトグッズを試すのに身体を貸す、だけ。気持ちいいものも痛いもの怖いものも恥ずかしいものもたくさんあるけれど、結局どれも気持ちいい。

エスコート上手な宗形の手が腰に添えられ、ふわっと香るコロンに酔いしれながら担部屋の奥に入る。甘えるように頬を寄せるとしつとり柔らかな生地が頬に触れた。

「可愛い」

さりげなく甘えたつもりなのに、いつでも宗形にはお見通しだ。腰にあった手が頭に移動し、甘やかすように撫でられる。これが好きで、そしていつの間にか恋をしていた。

「……むな……かたさん……」

可愛いと言われる度に締め付けられる胸。左手の薬指にはシンプルな細いリングが嵌っているし、着

ているシャツにはシワ一つない。スーツだってシャツだってネクタイだって、全てが洗練されていてセンスの良さを窺わせる。もしかしたら宗形のセンスがいいだけかもしれない。でも奥さんがいるのかな、と思うとつらくて。でも会いたい。少しの時間だけでもいいから。ここでだけでもいいから。

「……今日はやけに甘えただね」

見下ろしてくる目は優しい。でも「何かあったの」と訊いてくれないことにまた傷付いて。心の内に踏み込むほどの興味を持ってもらえないこともつらいし、恐らく慶人の想いに気付きつつもさりごとすり抜けていく術を持っている大人の余裕も齒がゆい。経験値なんて考えずとも豊富なことは分かるし、きつと若い頃だけでなく今でもさぞモテることだろう。

「……早くシテほしくて……」

会いたかったの、とは言えなかった。言ったらきつと終わってしまう。この気持ちに気付かれたが最後、宗形はもう二度とここには来ないだろう。いや、来たとしてもきつと慶人以外のボーイが担当することになる。それだけは絶対に嫌だった。自分のものにならなくてもいい。今は、少なくともこの気持ちにケリが付けられるようになるまでは宗形を独占したい。

「えっちなだね。最後にいつオナニーしたの？」

「んっ……」

低い声が腰を刺激する。ぞくりとして、触られてもいないのにペニスが起ち上がり始める。

「……分かんない……多分一週間くらい前……」

「一週間？ えっちなことが大好きな身体なのにあまりしていないんだね」

本当は、普段ならもつとたくさんオナニーしているのだ。でも今日のために我慢した。快感に飢える身体を宗形に見てほしくて。宗形が好きな淫乱さをもつと出したくて。気に入られたくて。遊びでも、都合のいい相手でもいいからこちらを見てほしくて。

「ひどい……でも溜まってるから……」

もうお喋りより触ってほしい、と宗形の身体に正面から抱きつく。本当はいくらでも話したい。でも話していても想いに気付かないふりをされてしまうくらいなら、触れてもらっている方がいい。

でも——。

(起ってない……)

もう慶人のペニスはバキバキなのに。年齢——宗形は恐らく四十代前半くらいだろう——の差のせいではない。慶人だって普段歩いているだけで勃起するような身体ではないので、これは単に感情の差だ。

「……ペニス、もう勃起しているね」

「んっ……出したい……」

敬語は使わなくていいと言われている。初めて会ったとき、最初こそ敬語を使っていたのだけれど身体が高まるにつれて余裕をなくし、ついタメ口を使ってしまったのだ。そのときの様子が可愛かったとかで、それからは敬語はなしになった。

「おちんちん……見て」

「ああ、じゃあまずは自分で脱いでごらん」

この部屋には入って右側にキングサイズのベッド、そして左半分の奥にはソファやテーブル、左の手前側にはそのときの新作グッズに応じて必要なセットが用意されている。宗形は慶人を部屋の真ん中に残し、一人で奥のソファに座った。組まれた長い足。まるでローソファのように見えてしまう。

「はい……」

エスコートしてくれる手はもうない。一人で宗形の前に向かい、そこで熱い視線を浴びながら、衣類を一枚一枚脱ぎ落としていく。

「今日の準備は？」

「アナルの洗浄だけです」

「ではお尻をとるところにするとどこから始めようか」

「はい……」

バサ、という軽い音と共にシャツが床に落ちた。露わになる乳首。この赤い突起を泣くまで弄られ続けたのは確か二回目に会ったときだ。

「……あれから……オナニーでは乳首を弄ってるかな」

「んっ……はい……乳首くりくりしておちんちんを勃起させています……」

どうしてだろう。プレイ以外ならタメ口なのに、最近はプレイが始まった途端敬語になってしまう。

「どうやってするのか見せてくれるかな」

「っ……はい……」

今日の新作アダルトグッズがどんなものかは聞かされていない。事前に知っていると純粋な反応が見られなくなるから、というのが理由だそうだけれど、きっと本当の理由はお客さんにより楽しんでもらうためだろうと思っている。

「んっ……」

まだ脱いだのは上半身だけだ。もうペニスでは下着の中で窮屈そうに身体を歪めている。でも宗形に言われたら逆らうことはできない。それに宗形が身体に触れるのは玩具を試すのに必要な分だけだ。ここは接客スタイルの風俗店ではなくあくまで玩具の販売を目的としたお試しの場なので、むやみに触られることはない。だから慶人は宗形の肌に触れたことは一度もない。

「あつ……ん……」

好きな人の熱い視線を浴びながら、自ら両方の乳首を指先で擦る。一番好きな触り方は乳頭を人差し指の先で弾くやり方だ。上下に弾く度に折れた乳頭がぶるんと戻って気持ちいい。

「勃起は？」

「してます……さつきより……」

「では脱いで見せて」

すぐにブレイに入れるように、ベルトはしていない。身体に跡が残らないようにという理由で緩めの服を着るようにも決められているので、ずり下げるだけでぼろんと解放を待ち侘びていたペニスが飛び出した。

「若いね」

「ん……はい……」

ペニスはまだ支える必要もないほどに力強く上を向いている。でもオナニーの指示はないし、まだ今日の玩具がどういったものなのかも分からないので何もすることはできない。

「乳首はもうおしまいでいいよ。後ろを向いて、立ったままこちらにお尻を突き出してアナルを見せなやろ」

「はい……」

恥ずかしい。立ったまま腰を垂直に折りアナルを曝す。バランスも取らないといけないので恥ずかしがついているばかりではいけない。それがまた、つらく気持ちいい。

「ん……見てください……」

上体を支えるために膝に当てた手を握りしめる。恥ずかしい。すごく。

「それはでよく見えないな」

「……はい」

手をお尻に移動させ、本来なら人に見せるところではないはずのそこを割り開く。

「……見えますか」

「ああ。よく見えるよ。綺麗なピンク色だ」

「っ……」

この部屋は玩具の状態がよく見えるように昼白色の蛍光灯が使われている。いやらしい玩具を使うというのに、まるでオフィスのように明るい室内。

「そういえばどんな風に洗浄しているのかな」

「んっ……僕は……シャワーで……」

「僕は、ということは人によるのかな」

「はい……………この洗浄ルームのシャワーで……………ホースをお尻に入れて、中にお湯を注いで綺麗にします」

「そう……………綺麗になったかの確認も自分でするの？」

今日はやけにトークが長い。もちろん嫌だとは思わないし、こちらのことを知ろうとしてくれているように嬉しい。

「はい。お湯の色を見て、汚れがないか確認します」

「それで、透明になったら終わり？」

「いえ……………」

尻を割る手が疲れてきた。不自然な体勢のせいで膝の裏の筋と太ももの裏側が痛い。でももっと見てほしい。いやらしい身体を、好きな人に。

「透明になったのを係の人に確認してもらって、……………アナルの臭いを嗅いでもらいます」

「どうやって？」

「四つん這いで……………今みたいに自分でお尻を開いて」

「鼻を近づけてもらうの？」

「はい……………」

裏事情について、話してはいけないとは言われていない。中にはそれを訊いて、次からは自分が準備をしたいと言う客もいるというくらいなので問題はないだろう。でもまさか自分のアナルの準備について述べるのがこんなに恥ずかしいことだとは思っていなかった。それに独占欲みたいで嬉しい。

「……………こんな風に？」

仕込んできたローションで塗れたアナルに風があたった。宗形の吐息だ、と一瞬で分かる。

「っ！」

「こら、ダメだよ。もう一度ちゃんと、匂いを嗅げるようにアナルを開いて」

「っ……………はい……………」

客の言うことを絶対にきかないといけないというわけではない。基本的に無理なことは無理と言っていいと言われているし、セルフワードは店で決められ、その取り扱いについても客には周知されている。だから本当に嫌なら嫌だと言っただけのだけだ——。

「……………僕の……………お尻の匂い……………嗅いでください。宗形さん……………」

二十年生きてきて過去一番恥ずかしいおねだりだ。こんなこと人に言ったことはないし、オナニーでも想像したことすらない。でも言ってしまった。大好きな宗形に、そんな恥ずかしいことを。

「うん、いいこだね……………」

褒められた直後にスンと言う音が聞こえた。本当に臭いを嗅がれている。

「ん……いい匂いだね。甘いな。消すだけじゃないのかな」

「あっ……はい……桃の香りって聞いています……」

そうだった。その工程を説明するのを忘れていた。でも宗形は怒ったりしなかった。

「聞いて……ああそうか、自分ではお尻の匂いは嗅げないからね。とてもいい匂いだよ」

「あ……ありがとうございます……」

自分のアナルの匂いを褒められる。そんなことを経験したことがある人なんて——恐らくここで働くボーイくらいしか経験がないのではないだろうか。

「慶くん自身の匂いが嗅げないのは寂しいけど、それは次にとっておこうかな。次のときは洗浄もせず、普段のままですべて待っていてほしい」

くくく

「さあ、降りてごらん。こっちだ」

手を引いて連れられたのはソファからガラステーブルを挟んだ向かいにある木馬だった。

「今日はこれを使うよ。でもこれは固定のためだ。怖くないからね」

「は……」

研修では使ったことがある。けれど本番では初めてだ。確か落ちそうで怖くて、あまり集中できなかったような覚えが。

幸いなのは、これが責めに使われるものではないということだ。横一米ートル、幅四十センチ程。かまぼこ型のアーチを描いているので鋭さはなく、乗っても痛みは生じない。

「さあ、お馬さんに乗ろうね」

「あ……」

しかしこの木馬の高さは慶人の腰の辺りで、研修で使ったものよりかなり高い。慶人は小柄で身長が百六十センチちょっとしかないのに、高身長な宗形にはそれほど高く感じられないのかもしれないが、怖かった。

「大丈夫、落ちないようにするから」

「……は……」

用意してくれた台に乗り、馬に乗るようにして跨る。目の前には太さも長さも立派なディルドが生えている。本当はこれのアナルに入れて身体を固定するのだ。でもそれを自らするのは怖かった。

「さあ、私の肩に手を回して」

「はい……」

やはりこれに入れるのだ。串刺しにされるような気分。でもこれがなければきつと簡単に落ちてしま  
うだろう。

踏み台に乗った宗形の肩に手を回し、身体を支えられながらデイルドの上に腰を下ろす。しっかりと  
ほぐされたアナルはつぷんと呆気ないほど簡単に亀頭を飲み込んだ。

「優秀なアナルだね。そのままゆっくり……痛くないね？」

「んっ……はい……」

適度な圧迫感が気持ちいい。それになんだかオナニーをしているような気分。これが宗形のデイルド  
だったらしいのにと思いながら自重に任せてデイルドを啜える。

「あっ……ん……入ったあ……」

結腸の手前くらいだろうか。長さもかなりあるが、それが今はありがたい。宗形は落とすようなこと  
はしないと思いつつ、それでもやはり落ちるのは怖い。

「いいこだ。よく頑張ったね。じゃあタマをここに入れようか」

「んっ……」

手を前について少しだけ腰を浮かす。潰れていた陰囊を掬うように持つてもらい、デイルドの前に用  
意されたそれ用のくぼみに入れてもらう。

「あん……」

「ん？ タマも好きかな」

宗形に触ってもらえるならどこでも好きだ。でもそんなことは言えない。この感情はまだバレてはい  
けない。でも大丈夫、まだ我慢できる。いつかこの感情に蓋ができなくなったら、隠しておけなくなっ  
たらそのときは告白してこの店を去ろう。そしてらもう接点はないし、人生のうちのたった一度の失恋  
として終わることができる。苦しいけれど。

「ん……好きです……気持ちいい……」

「そう、じゃあ今度タマ責めの玩具が出たらたくさんタマを弄ろう」

「あ……ほんと……？」

ということは少なくとも今の段階で宗形は慶人に飽きてはいない。まだ少しだけ先の未来まで見てく  
れているということだ。

「ああ、本当だよ。慶人くんはどんな風に弄られるのが好きかな」

(あ……)

そうか、そう捉えたのか。やはり宗形と慶人の心の内は同じではない。でも、いい。今はそれでも。「んっ……宗形さんの……」

好きにしてほしい、と思わず言ってしまうようになった。でも宗形が陰囊責めが好きかどうかは分からない。興味がないのにただ慶人が好きだからと合せてくれていただけだとしたら、好きにしてなんて甘えるように頼られたら興醒めだろう。

「ん？」

「……宗形さんの手で揉んでほしいです」

「私の手？ ああ、そうだね。まだ新作玩具がどんなものか分からないからね」

顔がカアツと熱くなった。そうだった。今はどんな風に玩具に弄られたいかという話だったのだ。どうしても宗形に触れてほしくて無意識に見当違いなことを言ってしまった。なのに宗形は瞬時に話を合わせてくれた。優しいだけでなく頭の回転も速い人。

「……今日のもドキドキします」

話の変え方としては及第点だろうか。いや、雑か。時折全てを見透かすような目をする宗形にはバレたかったかもしれない。でも分かっているにもかかわらず指摘するようなことのない優しさに甘えてしまふことにする。どうせ何を考えているかなんて踏み込んだことは訊いてくれないのだから。

「ああ、そうだね。すまなかった、待たせてしまって。ここに来る前から勃起させてしまう程待ち侘びていたのにね」

「やあっ……」

そんなこと忘れていいのに。やはり聡明な人は物事を何でも覚えてしまうのか。

「さあ、手を上げるよ。もし痛かったら言いなさい」

天井から吊られた鎖。その先にあるベルトに両手首を留められた。

「どうかかな」

「大丈夫です」

きつすぎれば痛いけれど、緩すぎれば落下の防止に繋がらない。それに内側は柔らかいタオル地なので多少擦れても怪我をすることもない。

「よし。じゃあ今日は目隠しもしてみようか」

「え……」

こんな高いところで拘束されているというのに目隠しなんて。今はディルドが入っているだけなので安定して座っていられるけれど、これで性的な刺激を受ければバランス感覚も分からなくなってしまうだろう。



「大丈夫。ね」

「……はい」

新作玩具がどんなものかは分からないけれど、もしかしたら見えないことで楽しむ類のものなのかもしれない。それに宗形なら信じられる。

少し顎を引いて目を閉じる。すると優しい生地が臉を包んだ。恐らくこれはアイマスクとかではなくタオルだろう。ガーゼか何かでできた柔らかいタイプのもの。

「きつくない？」

「はい、大丈夫です」

もう、宗形がどちらの方向にいるのかすらよく分からない。でも自分ですら見えない痴態を宗形だけが見るのだと思うと興奮する。全て余すことなく見てほしい。今から快感に耐えるのは全て宗形のためなのだから。

それからセーフワードの確認をされて、プレイが始まった。

「始めるね」と宗形は言ったはずなのに、しばらく経っても何のアクションもなかった。いやきつと時間感覚がおかしくなっているのだ。目隠しと興奮で、普段よりぐっと時間が長く感じられている。

「っ……ん」

恐らく玩具の準備をしているのだろう。物音は聞こえないけれど、ただじっとしている必要はないはずだから。でもそれにしたって静かだし物の動く気配すら感じられなかった。ただ感じるのは焼けるように熱い視線だけ。

「……今どこを見てると思う？」

「っ……」

恥ずかしい。興奮する。もしかして今日の玩具は目隠しをしているこのタオルなのだろうか。

「……ち、乳首……です……」

見やすい位置にあるだろう、そう思っていたけれど、宗形はくすりと笑った。

「違うよ」

ならどこなのか。その答えを宗形はくれない。

「……ち……ちんち……」

「んっ」

「おちんちん……」

「うん、正解。触ってもないのにぐしょぐしょに濡れてるから、このまま見ているだけでどこまで濡ら

せるのかなって思っ。視線だけで射精までできるかな」

「できっ……できないです……」

見られるだけで感じる。けれどさすがに射精までは無理だ。

「そうかな？ お尻にきゅつと力を入れてみたらどうだろう。大好きなペニスが入っているよ」

「やっ……やあ……」

大好き、なんて。本当のペニスなんて受け入れたこともないのに。

初めて接客したお客さんのときの新作はローターだった。亀頭に被せる、半球型カップのローター。使ったのは亀頭だけで、アナルには触れられてもいない。だからアナルへの刺激を教えてくれたのは全て宗形だった。特殊形状バイブやデイルドを使って。でも初めては宗形だなんて重いだろと思うと言えない。きつと宗形は、慶人は元から経験があつて淫乱なのだと思っているだろうから。宗形ほど経験豊富な人はそれくらいの方が気が楽だろと思うのだ。

「そうかな？ 腰が揺れてるよ。気持ちいいところに当てたいんだろう」

「あっ……ん……やあ……」

だってこんなの。両腕を高く上げて固定され、乳首も勃起した。ペニスも全て無防備に曝け出した状態で触れてももらえないのに動かないデイルドが自分の身体を貫いている。もどかしい。触ってほしい。弄ってほしい。でもそれをしてくれないのなら動くことくらい許してほしい。一週間も我慢した身体はもう限界だった。

「少し焦らし過ぎたかな。じゃあ玩具を試すよ」

「え……？」

今から、ということだろうか。始まっていたんじゃないのか。

「ごめんね、どうしても可愛くて。さあ、じゃあ今日は……ペニスを貸してもらおうよ」

「あ……おちんちん……？」

「うん、この可愛い。ああ、皮を剥いておこうね」

「ああっ！」

突然触れた手。見えないというのはこんなにも敏感にさせるのか。根元に向かって手繰り寄せるように皮を引かれると、あまり空気に触れることのない亀頭がびくりと揺れた。

「うん、出てきた。今日もピンク色だ。使っってはいないね？」

「んっ……オナニーだけ、ですっ……」

恋人がいるのか、というのは以前に一度訊かれていた。でもそれはストレートに訊かれたのではなく、こんな仕事をしていて恋人が嫉妬するんじゃないのかなんて言われた流れで言っただけだ。今まで一度

も恋人ができたことがないことも、オナニーが大好きだということも。

「いいこだ。ここは誰にも触らせてはいけないよ」

「あつ……」

まるで宗形のものになったようなセリフ。そんなに毎回、会う度に誰かが触れていないのか、これからも触れさせないかという確認をするくらいなら一言「この身体は私のものだ」くらい言ってくれたらいいのに。そしたらもっと幸せになれるのに。

でもずるい。そんな言葉はくれないくせに、落ち込んでいると分かりながらも見せかけの心配をするだけで踏み込んでくれない。でもそうやって独占欲だけは見せつける。まるで放し飼いだ。いや、自分の都合の良いときにだけ野良に餌を与えられているような。

「可愛い亀頭だ。さあ、感想を聞かせてくれ」

「あつ……あ……？ なに……」

ぬるっとしたものがペニスを覆った。見えないから少し怖い。でも気持ちいい。ぬるぬるしたもの。

「これは何か分かるかな」

「オナ……オナホール……？」

「正解。でも普通のオナホールとは少し違う」

「あつ……」

大人の玩具を使った経験はここでしかない。初めての経験がここで、あまりの快感の強さに怖くて自分ではとてもじゃないけれど使えなくて。結局家でオナニーするにも手でペニスを扱っただけ。でも頭の中では宗形がたくさん気持ち良くしてくれるのでそれで十分だった。それにここで与えられる快感に身体が慣れてしまったら宗形に楽しんでもらえなくなってしまうかもしれない。

「何が違うか分かるかな」

「あつ……んっ……」

ここ以外で使ったことがないので比較対象がそもそも少ない。何が違うかなんて全く分からない。

「分かんないッ……」

「分からない？ そうか……では普通のオナホールと大差ないということかな……」

「あつ……」

それではダメだ。ここでの目的は実際に使ってもらって、それで購入してもらおうことなのだ。

「んっ……まっ……待つて……」

まだ入れたばかりで分からないだけだから——そう言いたいのになんだかペニスがくすぐったい。

「ああ、そうだね。ゆっくり時間を掛けてオナホールの感触を確かめてごらん」

あれ、と思った。なんだか宗形の声が少し遠くから聞こえているような。

「宗形さん……？」

「ん？ 何かな」

体勢のせいで身体が痛むようならすぐ言いなさい、とは言われている。だから声を掛けて無視されるようなことは一度もない。それに方が一にも落ちないようにとしてくれているはずなのにすぐ触れられる距離にいないらしいと感じるのはどういうことなのか。

「……？」

「ん？ ここにいるよ」

声の位置は先程とそれほど変わらない。でも手を伸ばすこともできない。

「大丈夫、近くにいるよ」

「……はい……あの……」

「ん？」

「いえ……」

なぜだろう。少なくともオナホールに触られていないことは分かる。なのに気持ちいい。ただ締め付けるだけじゃない。冷たいというほどではなかったけれど少しひんやり感じていた内部が少しずつ熱を持つていくような感触。

「感じたことは全て言ってるらん」

「……はい……」

そうだ、これはモニターのようなものなのだ。玩具開発部門は別にあって、そこではその担当の人が何度も何度も使って改善を繰り返しているのだ。だからこうして販売できるような状態になっている。でも宗形は——慶人にもだけれど——初めて見るものなのだ。スタッフから説明は受けているはずだけれど、買うのなら使い心地はしっかり知っておきたいのだろう。

「……あの……なんか熱いです」

「どこが？」

「あ……すみません……おちんちんです……オナホールに包まれているところがなんだか熱く感じています」

「そうか……感触はどうかな」

「ちよつとくすぐりたいような……でもきゅって縮まって……気持ちいいです」

でも快感よりもねっとり熱いものに包まれるような感覚が強くなってきた。

「うん、いいね……じゃあもう少しそのままペニスの感触を意識していきましょうか」

「はー」

どちらにしても目は伏せられている。そのまま閉じて、意識をペニスに向ける。どうしてもアナルがひくついてしまうけれどなんと頭から排除するしかない。

「あっ……」

急にペニスが跳ねた。何かがおかしい。

「どうした？」

「あ……おちんちん……きもちい……」

オナホール内部にある褌が動いているような感じがする。でもまさか。だって重くもないし、機械のような硬い部分も感じない。それとも電動のオナホールなのだろうか。だから少しづつ熱く感じるようになっていたのか。

「そうか。どんな風に気持ちいいのか説明できるかな」

「んっ……なんか……褌……が、動いているような……」

「うん、そうだよ。これは特殊なオナホールだ。中が熱くなるにつれてどんどん気持ち良くなるよ」

「あっ……これ以上……?」

扱かれていないので射精することは難しそうだ。けれど意識し始めたからなのか、一気に動きが激しくなってきたように感じる。

「あっ……あっ……」

まるで舌だ。細かい舌のような突起がちろちろとペニスを舐めているような感覚。

くくく

ちろちろちろちろ——。

乳首、ペニス、尿道、そして前立腺がくすぐられる。

「あっ……ああっ……」

人ではないそれは疲れを知らない。ただ慶人の身体の熱を吸い取って、それを動力に責め続ける。

「あっ……ああっ……」

ペニスがむずむずする。いく前兆だ、とすぐに分かる。でもやはり一気に射精には向かえない。

(お腹の奥すこいっ……)

尿道を限界まで膨らませたブジーの先端が前立腺をくすぐっている。無数の突起。まるで生き物に敏感なところを舐められているかのよう。

「ああっ……」

「上がってきたな……」

「ああああっ……ああっ……」

さつき経験しているからか、快感を拾い集めることは難しくなかった。意識を全ての気持ちいい場所に向け、それから宗形の存在を意識する。

「あああっ……宗形さんっ」

「ああ、いるよ。大丈夫……上手だ。乳首……乳頭か。乳頭もちゃんと動いているかな」

「はいっ……すごい……おっぱいの先っぼちろちろっ……ああっ」

言葉にすると余計に気持ちいい。卑猥な言葉をたくさん口にして、自分で興奮を高めていく。

「そうか……おっぱいの先が好きなんだね。本当に気持ち良さそうだ」

「ああっ……きもちっ……おしっこの穴もすきいっ」

「うん、大きいのをしっかり啜えてる。一つの突起が一ミリ以下なんだ。どれほどの突起の数かは想像もつかないが、狭い尿道内でも膨大な数になるだろうね」

「あああっ……」

頭の中でインギンチャクが揺れている。細かい突起の中にペニスを突っ込み、そして尿道口から侵入してきたインギンチャクに内部からも虐められる。

「ああっ……だめっ……あああっ」

その脳内のイメージは一気に身体を昂ぶらせた。これはもう刺激による快感ではなく、所謂脳イキに近いような感じ。まるで催眠術のような。

「あっ……いっ……いくっ……いきそっ……」

「ああ……ゆっくりだよ……一気にはダメだ。ちゃんと中の小さな刺激に集中して」

ゆっくり、と言われたので軽く深呼吸をする。それがまた、自分で自分を焦らしたように感じて感度が上がる。

「あああっ……ああ……」

「そう、呼吸を乱さずに、穏やかにいくんだ」

「あああ……んっ……ふうー」

呼吸を意識。でも気持ちいい。感度が上がっていく。

「ああ……」

「いいこだ……もう一度深く息を」

「あ……ふー……ふううー……」

「そう……じゃあそのままゆったりした呼吸のままできなさい」

宗形の声が脳も身体も支配している。逆らえない。深く息を吸いながらペニスの奥が弾ける感覚を待つ。

「ふ……ふううー……ああ……ふー……」

強い射精感が来れば、逃がすように息を吐く。ゆっくり、ゆったり――。

「ああ……」

また宗形が静かになった。きつともう任せてくれるのだ。信用してくれている。これ以上の言葉は必要ないと。

「あ……ふうー……んっ……ふー……ああ……ふー……」

ゆったりイく、というのを意識しながら押し寄せる激しい波を切り抜け、そして――。

gooneone

前編約5万3千文字です。

新作の大人玩具を試すのに使われるボーイの話。

ハピエンです。愛あり。

前編も後編もだいたいエロ。